

一心の体徳

(一) 名義撰対

| | |
|--------------|-----|
| 一、一心の体徳…………… | 二八七 |
| 二、名義撰対…………… | 二八八 |
| 三、約三種門明…………… | 二八九 |
| 四、約三法門明…………… | 三〇〇 |
| 五、約三心門明…………… | 三〇四 |

(二) 願事成就

| | |
|-------------|-----|
| 一、標 章…………… | 三二二 |
| 二、明心成就…………… | 三二四 |
| 三、明行成就…………… | 三三〇 |

この一心の体徳と題する講述は、去る昭和十三年三月二十九日より四月四日に亘る一週間、本部の春季講習に於いて講じたる、往生論註（証卷御引用）の名義撰体章及び願事成就の二章である。

この二章を「一心の体徳」という標題のもとに述べるのである。

(一) 名義撰対

一、一心の体徳

「世尊我一心、帰命盡十方無碍光如来 願生安樂国」と天親論主は論の建章に於いて、その超世無上の大信心を「我一心」と告白せられた。

この一心こそは、大悲本願を全うじたる如来回向の信樂に外ならない。この一心はやがて、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向といわゆる五念門の宗教となつて行者の上に展開されて来るのである。

信心は念仏である。信心決定して念仏申すということは、浄土真宗の全てである。しかるに、この信心決定の念仏より、一切の尊ばるべき宗教生活の始終が生まれるということは、翻つてこれをいうならば、一心こそは、無量の徳を内具しているということである。無量の徳の内具とは、行巻に、「諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり、真如一実の功德宝海なり」と説かれるのがそれである。しかるに浄土の真宗にあつては、全て一切の功德は、これを行者の発願成就すべきものとせずして、いわゆる法体の功德、即ち一切の功德を如来の本願名号の内容として仰ぐのである。この如来本願の無量の功德こそは「この大功德を一念に弥陀をたのみ申す我等衆生に回向しますます故

に(御文章)そこに一心即ち信樂を成ずるのである。されば、一心が無量の徳を具するとは、如来の本願に無量の徳を内具するということである。

時計の長針短針が廻りつつ時刻を指しているのを見れば、時計は至つて簡単なものである。しかしその裏には、精巧なる機械があつて動いている。念仏行者の、「信心決定して念仏申す」相は簡単である。しかしながらその奥には、如来浄土の本願の法、正しい精巧なる法があつて動いているのである。これより明かされる所の、名義撰対、即ち、九法四心の法門こそは、一面、還相回向門の世界を説くものでありつつ、それは又、行者一心の体徳を示すものである。漸を追うて明かにされるであろう。

二、名義撰対

一。「名義撰対者」

まず最初に「名義撰対者」という標章を講ずる。

名義撰対とは、名義とは、名と義理、即ち能詮の名(能詮とは、あらわして、能く義理を詮す名)と、しよせんの義(しよせんとは、あらわされて、名によつて云い詮わさるる義理)と、名と義とを相對相撰せしめて、共通した義の中に多くの名を撰めるということを撰対というのである。

ここでいうならば、般若の智慧、方便の智慧というは義である。その般若智、方便智という義を詮わす為には、智慧門、慈悲門、方便門という名も、般若智という義理、方便智という義理に撰められなければ、何であるかがよくわからない。そこで、智慧²門、慈悲門、方便門の三種門の名と、般若、方便という義と互いに相對相撰するのを、名義撰対というのである。

しかるに何れの名を何れの義に撰めるかということについて、二義がある。一は六要鈔の説で、一は大派開徹院師の説であるが、最初から言つてもわからないから、全文がすんでからにする。先に挙げた、三種門の名と、般若、方便の義との名義撰対は六要の説である。

以下本文に就いて語る。正文の内容が、約三門明(三門に約して明かす)、約三法門明(三法に約して明かす)、約三心明(三心に約して明かす)、と三段になるが、最初に三門に約して明かされる。

三、約三種門明

一。本文「向説智慧慈悲方便三種門撰取般若、般若撰取方便応知」

これは、『往生論』に天親論主が説かれた言である。即ち「向に障菩提門に於いて、智慧門、慈悲門、方便門の三種門が説かれた。この三種門は般若の智慧を撰取する。又般若は方便智を撰取する」とこれが論の文意である、これは如何なる義であろうか。

一。已に障菩提門に於いて、論には「一には智慧門に依りて、自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離せるが故に」と説かれ、鸞師は「進むを知りて退くを守るを智と

曰い、空無我を知るを慧と曰う。智に依るが故に自樂を求めず、慧に依るが故に我心自身に貪著することを遠離せり」と註釈せられた。

智慧門、慈悲門、方便門とは、これ本菩薩が成就せられる巧方便中の差別である。即ち、一切衆生を救つて利他成就せんとする菩薩の大悲利他心の内容なのである。その利他の大悲を明かさんとするに当たつて智慧門を説かれるのは、不可解のようであるが、智慧によつて真実の自利を成就することより外に、利他の世界を成就することもあり得ないが故である。そこで、この智慧門に於いては「智慧門に依りて、自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離するが故に」と、智慧門に於いて、却つて自らの樂を求めるところの凡夫や二乗は、自樂を求めるときに捨てるのが説かれる。これ自樂を求めるところの凡夫や二乗は、自樂を求めるときに、自損損他の道をゆくものである。貪欲の自利は、自利ではなくて自損である。私の心が自身に貪著することこそ自損である。自損は必ず損他である。そこで智慧門の智を「進むを知りて退くを守る」とて、智を実践的なものとなし、「空無我を知るを慧という」とて、慧を体験的なものとして表現せられた。

「退くを守る」とは、自樂にとどまろうとする心から出ることであり「進むを知る」とは、自樂を求めるときから出てのみ、不退転の歩みを成就することが出来ることを示されたのである。かくて、方便智の具体的相たる第一智慧門は、体験的な智慧がその根底となり、それによつて自損損他を遠離しようとするのであつて、般若の智慧なくしては巧方便の世界は成就しないこと、衆生濟度の巧方便は、如実の智慧、即ち般若の実智を内具することを示せるものである。

一。第二の慈悲門を説いて、論には「二には慈悲門に依りて、一切衆生の苦を抜き、無安衆生心を遠離せるが故に。」と曰い、鸞師は「苦を抜くを慈と曰い、樂を与うるを悲と曰う。慈に依るが故に一切衆生の苦を抜く、悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。」と説かれてあつた。無安衆生心即ち衆生を安んずることなき心とは、我心貪著心の一步発展したものである。己にあつては我心貪著心であり、それが一步外に衆生に向かえば無安衆生心である。我による貪著心の人は、人に不安心ばかり与える。であるから、この我身貪著心と無安衆生心とは別なものではない。慈悲門によつて抜苦与樂するには、そこにこの無安衆生心が遠離されねばならない。ここにも巧方便を全うする為には、その根底は如実の智によらねばならぬことが示されてある。

一。次に「三には方便門によりて、一切衆生を憐愍したまう心なり。自身を供養し恭敬する心を遠離せるが故に」と。この論の説に対して、鸞師はこれを釈して「正直を方と曰い、己を外にするを便という。正直に依るが故に、一切衆生を憐愍する心を生ず、己を外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり。」と説かれた。方便門とは、衆生を憐愍する心であるが、特に「自身を供養し恭敬する心を遠離する」ことが示される。この自供養心が方便門に於いて捨てられなければ、利他の大慈悲は成就しない。しかるに方便の語を釈して、方とは正直、便とは外己(己を外にする)ことと説かれたことは注意すべきである。正直とは何であるか、これ智慧の相である。便とは己を外にして、傍にして、衆生を正とし、内とすることである。あたか

も母親が、己は外寒さに堪え、子供を内に温めるが如くである。かるが故に方便とは智慧に即する慈悲である。慈悲に即する正直によつて、一切衆生を憐愍する心を生ずるのであり、智慧に即する慈悲即ち、己を外にする心によつて、自身を供養し恭敬する心を遠離するのである。であるから、方便門もその根底には智慧を内具するのである。

一。以上によつて智慧慈悲方便の三種門は、それ自体、真実の智慧を根底とせることがわかつた。これ論主が「三種門は般若を撰取す。」と云われる所以である。真実の方便は永遠に実智即ち般若の智慧を体しているのである。

次に「般若は方便を撰取す」と説かれるのは、般若の真実智は必ず方便智となつて現れて来るものである。実智が必ず衆生済度の方便智を具することを「般若撰取方便」(般若は方便を撰取す)と云われるのである。かくの如く般若と方便とが互いに相望して、権実相摂の義を顕して、智慧等の三門が、或は般若に帰し、或は方便に撰して、権実相即することを、名義撰対と云われるのである。

一。本文。「般若者達如之慧名。方便者通権之智称」

二智の分齊

一。これより已下、曇鸞大師の註釈である。

般若とは如に達する慧の名である。如とは真如、真如に通達する智慧を般若というのである。一切諸法(すべてのものということ)は、本来同一真如である。凡夫はこの般若の智慧を成就せざるが故に、万法の差別に囚われて、我心貪着心をおこして、その優劣によつて、取捨の迷情をおこすものである。しかるに、仏菩薩は、この般若の智慧によつて、万有、本来同一性相にして、差別を超え、一如平等なることを照見するのである。諸法の本性は真如である。故に真如を法性と云われるのである。諸法は、柳は緑、花は紅なるままに、平等なる真如法性である。真如は、不可壊であり不増不減である。この万法の本来同一真如であることを照出す光こそ、般若の智慧である。

然ればこの万有の実相、即ち法性真如を照出す般若の智慧は如何にして成就するのであるか。これ即ち、菩薩の修行によるのである。大経に於いて、法蔵菩薩の永劫の修行を説かれるはその為である。願行成就して正覚を成就するとは、無量寿、無量光の法身を成就するに外ならない。無量光とは智慧光である。般若の智慧の光明である。光明は寿命を体とする。寿命とは、無為法身、即ち真如法性の三世に等流する相である。されば、智慧光とは、真如そのものの光に外ならない。であるから般若の光とは、真如に出でて、真如を觀照するのである。般若の智慧とは真如の光である。真如の光によつて真如に通達するのである。それは宛も、太陽の光によつて太陽を照らし出すが如くである。太陽以外の光によつて、太陽を照見することが出来ない。

一。次に方便智を釈して「方便とは権に通ずる智の称なり。」と云われる。般若の智が平等一如の世界を照らす智慧であるに對して、方便智は、差別の衆生界を照らす智である。権とは実に對する語で、一切差別の事相を悉く権法となし、常住不變の真理を實法といふのである。先の般若が真理（即真如のこと）を照らす光であるに對して、方便智は、一切万有差別の事相を照らす智慧である。そこで、般若と方便とこの二智を、実智、権智と云い、又真諦の智、俗諦の智と云い、又根本智、方便智とも名づけられるのである。太陽の光に對して開眼せるものは、一切の万有を見るが如く、実智を成就すれば、自ら権智を成就するのである。

一。本文。「達如則心行寂滅。通權則備省衆機。省機之智備応而無知。寂滅之慧亦無知而備省」

一。一如に通達する真諦の智慧を成就した時、心行共に寂滅する。衆生は、心行、即ち分別迷妄の心を生じ、それが行いとなつて外に現れ、貪欲によつて外物を追ひ、心行心行と、流転を続けるものである。しかるにそこに真諦の智を成就すれば、この心行を寂滅せしむるのである。言いかえれば、煩惱を寂滅することによつて、般若の智慧光を顕現するのである。それは丁度、氷に熱を加えれば、融けて水となり、水となれば、鏡となつてものをうつすが如くである。

一如に達する真智は、鏡の一切を写してしかも善悪取捨の情なきが如く、無知である。即ち、この真知の世界、空無所得に達すれば、色も不可得、心も不可得、知るべき色もなく、知るべき心もなく、心行共に滅して唯、無知である。

心行寂滅して無知なる般若の智慧は、それ故に衆生の機類の差別、苦楽因果等の相知らざるなき方便の権智をおこすのである。であるから「権に通ずれば、則ち備さに衆機を省る。」と云われるのである。しかしながら、具に衆生の機類を知るからとて、般若の智より外のものではないが故に、「機を省るの智は備さに応じて無知なり。」と、機を知るの方便智がそのまま、実智の無智なることを示されるのである。されば「寂滅之慧、亦無知にして備に（衆機を）省る」と、どこまでも、真智のままが俗智、俗智のままが真智と、般若と方便の相即することが示されるのである。

一。本文。「然則智慧方便相縁而動相縁而靜。動不失靜智慧之功也、靜不廢動方便之力。」

二智の相摂

一。般若とは、真如実相に通達し、觀照する真諦の智であり、方便とは、衆機を知りて、衆生済度の善巧をめぐらす俗諦の智であつた。しかるにこの二智は、決して孤立して成ずるものではなくして般若の智に衆生の苦相映ずれば、必ず方便の権智をおこし、方便の権智は般若の真智に依つてはじめて、衆生済度の大用を全うするのである。

先に「機を省るの智は、備に応じて無知なり。寂滅の慧亦無知にして備に省る」と云われたのは体の互融に約して、方便は般若を体し、般若は方便を摂することを示されたのである。

今この文は、体の互融がやがて用の相資を起すことを示されたものである。然則とはこれを語るものである。「然れば則ち、智慧と慈悲と相縁じて動じ、相縁じて静なり。」般若は静であり、方便は動である。しかるに方便智の動は、般若の静をはなれてはなく、般若の静は、方便の動をとまなう。動にしていよいよ静、静にしていますます動、動なるままが静、静なるままが動、この動静一如の境を失わないのである。

般若の慧は絶対の静であり、方便の智は永遠の動である。般若の静を失うことなくして、方便の動を起し、方便の動を廃することなくして、般若はいよいよ静である。

般若は真如の平等を照らす光であり、方便は衆生を再度する大悲のはたらきである。般若の寂光なくして何ぞ一切衆生の苦悩を救う大用を発することが出来よう。一切衆生を救うの大用、即ち方便なくば般若も亦二乗の証果と異なることはない。

菩薩は限りなく生死に出でて利他を成ずといえども、智慧に住したまうが故に、生死にあつて生死に住せず。如何なる生死動乱の中にあるとも、寂滅の自利を失わざるは、生死即涅槃なりと知るところの慧、よく如に達するが故である。この不住生死の徳を今、「動の静を失わざることは智慧之功なり」と説かれるのである。

菩薩は、諸法本来畢竟空にして寂滅なり、と証知すれども、しかも、縁生凡夫の苦悩を省みて、涅槃に住せず、その大慈悲によつて永遠に利他を廃せず。かく、涅槃を悟つて涅槃に住せざる不住涅槃の徳の故に、「静の動を廃せざるは方便之力なり。」と示されるのである。かくして「動静一如」の境とは凡夫迷情の妄動を指すに非ずして、従果向因の菩薩の悲智一体の境を示すのである。

一。本文。「是故智慧慈悲方便攝取般若。般若攝取方便」

方便智は具体的には、智慧門、慈悲門、方便門の三種門を具して、衆生を度するのであつた。このことは、先に詳しく述べた如くである。この智慧門、慈悲門、方便門の三種門は、般若を摂取して、動の中に静を失わぬのであり、悲の中に智慧を失わぬのである。又般若は方便を摂取して、静中動を失わず、慧の中にますます大悲の大用を失わぬのである。かくして二智は互いに相摂して一如に統融するのである。

一。本文「応知者、謂応知智慧方便是菩薩父母、若不依智慧方便菩薩法則不成就」

華嚴經入法界品に言く「以般若波羅蜜為母、大方便為父」

維摩經仏道品に言く「智度菩薩母、方便以為父。一切衆道師無不由是生。」

般若を母に、方便を父に喩えて、この二智より菩薩を生ずることを示すのである。

一説に云く、般若の実智は内に法身を養育す、故に母に譬え、方便は外に衆生を濟度す、故に父に喩うと。可。

菩薩の法（法とは功徳）は智慧を以て如に達し、方便を以て衆機を省る。智慧は静なるが故に母、方便は動なるが故に父、この二智なくば菩薩あるべからず、故に「是れ菩薩の父母なり」と云われるのである。慈悲あるに似たるも智慧なくば凡夫の迷情

にすぎず、智慧あるも大悲なければ二乗である。菩薩は必ず二智を所有する。この智慧と方便との二智に依らずば、菩薩の法、即ち功德は成就せざることを決積せられるのである。されば次にその所由を微積して云く、

一。本文。「何以故若無智慧為衆生時則墮顛倒。若無方便觀法性時則証實際。是故応知」

一。この節は、悲知双運せざれば、菩薩行の成就すべからざるを結示されるのである。もし智慧を成就することなくして衆生を利益せんとすれば、愛見の悲であつて、凡夫の顛倒に墮するし、もし亦専ら法性を觀じて智慧を得るも、衆生濟度の方便なくば、二乗の實際を証するに了る。故に、般若と方便、悲智並行して、菩薩行を如実に成就するのである。天親論主の「応知」とは誠にこの意である。

以上二智のこと、もとより還相の菩薩の徳を示されるのであるが、これを主徳に約すれば、如来正覺の大慈悲、即ちいわゆる論の「正道大慈悲」と示されたものである。正しき智慧より生じたる大慈悲こそ出世の善根であつた、十八願不虛作の徳はこれによつて成就せられるのである。

四、約三法明

一。本文。「向説遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心。此三種法遠離障菩提心応知。」

一。この節は、遠離の三法を結んで無障心に帰するのである。即ち、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心の三法の名と、無障の一心とが、互いに名義撰対することを示されるのである。この三種の法の成就によつてのみ、菩提に於いて無障を成就し得るし、この三種にして成就せずば、菩提に於いて三種の障得となることを示されるのである。

ここに挙げられたる、我心貪著自身、無安衆生心、供養恭敬自身心の三種心は、菩提を障得する心である。即ち、我心貪著自身とは、凡夫の身見であり、無安衆生心とは、二乗の自調孤度心であり、供養恭敬自身心とは、凡夫の名聞利養の心である。第一と第三とは、凡夫の二惑であつて、生死に住する心であり、第二は、二乗の涅槃に住する心である。凡夫の無明煩惱によつて生死に住する心と、二乗の大悲を失つて涅槃に住する心とは、真実の菩提心の障得である。一は自利を欠ぎ、一は利他を失う。自利利他一如の柔軟心によつてのみ菩提心の成就することは、既に説かれたが如くである。故にこの三種心を遠離する三法は、無障の一心を成就するのである。

一、本文「諸法各有障得相。如風能障靜土能障水湿能障火、五黒十惡障人天四顛倒障声聞果。此中三種不遠離障菩提心」

示障相

一、論主の意を解したまうのである。まず、諸法に悉く障碍の相あることを示して例知せしめられるのである。

風能障静

土能障水

……………・諭

湿能障火

五黒十悪障人天

……………例

四顛倒障声聞果

此中三種不遠離障菩提心……………法

五黒とは、善を白、悪を黒という。五黒とは五逆のこと。五逆に小乗と大乘との二種あり。小乗の五逆とは、一、殺父、二、殺母、三、殺阿羅漢、四、破和合僧、五、出仏身血。大乘の五逆とは、一、寺塔を壊し経蔵を焼き、三宝の財物を盗む。二、三乗の法を謗り、聖教を粗末にす。三、僧侶を罵り責め使う。四、小乗の五逆。五、因果を揆撫し、十悪を行す。已上の五逆及び、殺生、偷盜、邪淫、綺語、妄語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、愚痴の十悪を行すれば、人天の果報の障碍となる。

四顛倒とは、顛倒とは、常道に違背し、正理に順応せざること、大経下巻に「顛倒上下、無常根本」とあり。或は、いわゆる邪見のこと、即ち、事理の真相に契当せざる誤謬の見解をいう。この顛倒の邪見を略して、倒見と云われ、又妄想顛倒、虚妄顛倒と熟字となして用いられる。皆邪見のこと。

論註には「いわゆる凡夫人天の善果は、若は因、若は果、皆是れ顛倒なり、皆是れ虚偽なり是故に不実功德と名く」と云い、又「哀なる哉。衆生この三界に締れて顛倒不浄なり」とあり。皆是れ邪見を示されたのである。

四顛倒とは、凡夫の四倒は、無常を常とし、苦を楽とし、無我を我と執し、不浄の世界を清浄となし、生死界の無常、苦、無我、不浄を悟らざること。二乗及び菩薩の四倒とは、涅槃の常、楽、我、常の四徳に於いて、常を非常、楽を非楽、我を非我、浄を非浄となして、涅槃の四徳に対して倒見を懐くことである。

是の如く、今菩薩の菩提を求むるに、上の我心貪著自身、無安衆生心、供養恭敬自身心の三種心を遠離せずば、菩提の碍げとなることを示されるのである。

一。本文。「応知者。若欲得無障 当遠離此三種障碍也。」

积応知

一。以上の三種心は、菩提を得るの障碍である。応知と論主の言うは、この三種心の障碍を除かぬ限り、菩提心の成ぜざることを知るべしとのたもうのである。

我等は、この三種の障碍について聞きつつ、深い内省に誘われるものである。この三種の心ある限り菩提心の成就せざることと思う時、到底、自力の菩提心は成就せざることを知ることが出来る。如来回向の一心帰命が、清浄願往生心と云われ、眞実信心と云われ、無上菩提心と云われるのは、それが如来の智慧、慈悲、方便の三門を全

うじて成就されたる本願名号の回向によつて顕現するが故である。三種心を自ら遠離する能わざる凡夫も、この障碍を超えたる如来本願力の回向による清浄なる大信心によつて救われるのである。眞実一心は、この三種心を超えたるものである。

五、約三心明

一。本文。「向説無染清浄心、安清浄心、樂清浄心。此三種心略一処成就妙樂勝真心。応知」

一。順菩提門の三心。この第三節に於いては、順菩提門に於いて説かれたる三心、即ち無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心名が、妙樂勝真心と謂われる義を成就して、名義撰対することを示されるのである。

先に、順菩提門に於いて、智慧門によつて無染清浄心を成就し、慈悲門によつて安清浄心を、方便門によつて樂清浄心を成就して、以て菩提に隨順することが説かれた。即ち、己が為に諸の樂を求むる心を染着心と云われ、この心菩提の為に障碍なるが故に、菩薩は智慧によつて、己が為に諸の樂を求めざる無染清浄心を成就する。この心は、よく菩提に順ずるが故に、順菩提門と云われるのであつた。この無染清浄心こそ、次の二種清浄心を成就する根本心である。

次に慈悲門によつて安清浄心が成就せられる。安は安穩で、衆生の苦を抜き、菩提安穩の処に衆生をおかんとする度衆生心を安清浄心と名づけるのである。これ無染清浄心の己の樂を求めざる心を更に一步進めたものである。終に、樂清浄心とは、一切衆生をして、大菩提を得しめんとする心である。菩提は、畢竟常樂の処である。菩提をおいて外に、永遠の常樂はあり得ない。故に、方便門によつて、一切衆生をして大菩提を得しめんとするのである。しかるにかかる菩提は何に依つて得るのであるか。具体的には、大乘門たる安樂仏国土に於て得るのであるが故に、天親論主は「衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に。」と説かれた。樂清浄心とは具体的に自ら安樂仏國に願生しつつ、それを通して、衆生を撰取して彼の國に生ぜしむるより外に道なきことを示されたのであつた。

かくして、隨順菩提門の三心は、要するに眞実の自利を全うすることによつて利他を成ずる、菩提心の終始を示されたものであつた。無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の一を欠けば、菩提を成就することは出来ない。この三心が順菩提門の三心と云われる所以である。三は遂に三でなくて、三は一でなければならぬ。然らばその一とは何であろうか。これ即ち妙樂勝真心がこれである。

一。略一処。略とは、粗略の義ではなくて、総称のことである。一処とは、所縁の境を指す。經に係念一処というが如くである。

「此三種心、略一処、成就妙樂勝真心」

略一処とは、成就せる菩薩の位を示すものである。全て、未熟なるものは、この略一処の徳を持たざるものである。例せば、自利の智慧は、自己を縁じて成就し、利他

の慈悲は、物を縁じて為さんとするが如き、常に二縁以上によつて生きんとするは、略一処の徳を持たざるものである。しかるに成就の機は、樹木の太陽一つを縁じて成長するが如く、略一処の徳を持つのである。

今の三種心の如きも、無染清浄心は自己を縁とし、安清浄心は、他身を縁として成ずるとなすが如きは、略一処の徳なきものである。かく二縁によらんとするは、三種心未熟なるが為である。

しかるに今、略一処とは、三種心が、同じく一仏徳を縁じて成就するが故に、略一処成就と云われるのである。されば、次に、釈して、從愛樂仏功德起と説かれるのである。誠にこの略一処の徳たる必須極要のものである。信仰生活の終始は、一仏徳を縁として成就すべきに、歡喜と云えば歡喜を、信心と云えば信心を、教法を聞信すると云えば善知識を、信樂と云えば弥陀を、礼拝と云えば身業、称名と云えば口業を、各々一一の徳がバラバラに縁を求めて一に統融せざるを、自力と云われる。順境に自らの心を用いてこれに囚われざらんとし、逆境には、唯忍從によつてこれを超えんとし、非難疑謗には、これを自己の劳作によつて封じんとし、賞讃には、名利心を以てこれを受け取らんとす、かくの如くにして歩まんとすれば、念仏もついに隨縁の雜善を出でざるべし。八万四千の諸縁、これを廻顧することなく、直ちに本仏を仰ぎ、一切をして略一処に解消せしめて、無碍の道味を体解するに至つて、念仏は、真の力を顕現し、十八願の一心正念の直道と云われるであろう。かくの如く、菩薩は、今の三種心をも、略一処に一仏徳を縁として成ずるのである。

一。妙樂勝真心。無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心は、これを義に依つて結成すれば、妙樂勝真心と名づけられる。即ちこの三心の名は、妙樂勝真心の義と、名義撰対するのである。

誠に妙樂勝真心とは、広略相入の仏徳を觀じて成就する心である。仏徳に帰依して巧方便回向を成じ、自他の成仏を自然に成ずる隨順菩提門の心相を妙樂勝真心と名づけられるのである。

一。本文。「樂有三種。一者外樂、謂五識所生樂。二者内樂、謂初禪二禪三禪意識所生樂。三者法樂五角反樂魯角反謂智慧所生樂。此智慧所生樂、從愛仏功德起。」

樂の三種。

一。鸞師は、樂を分別して、外樂、内樂、法樂樂の三種となし、以て、菩薩の妙樂勝真心の何たるかを示さんとせられるのである。

まず、外樂、内樂とは如何なるものなるかを示して、「一には、外樂とは謂く五識所生の樂なり。二には内樂とは、謂く初禪二禪三禪の意識所生の樂なり。」と云われる。以下、初學者の為にやや委曲をつくして述べる。五識即ち、五根、眼、耳、鼻、舌、身が、色声香味触の五境において起こすところの樂を五識所生の樂と云い、これを外樂と云われるのである。即ち感覺を通しての下等なる樂である。次に内樂とは、意識におこる樂であつて、いわゆる、精神的なる樂である。初禪二禪三禪とは、欲界(地獄・

餓鬼・畜生・修羅・人間・及び天上界中の第六他化自在天までをいう」と、色界と、無色界(心のみあつて、色即ち形なき世界)の三界中、色界をいうのである。禪定によつて得る果報にして、形善美を極めた世界と云われる。この色界に於ける樂を、内樂と云われるのである。この樂は、禪定(深き精神生活)によつて生ずるいわゆる、色界定心位の樂であつて、外塵(客觀界の五境)によつて生ぜず。故にこれを内樂といふのである。然れども、この内樂は、もと有漏、無漏に通じて云われるものであつて、凡夫外道の所得は有漏、聖者の所得は無漏の法樂、この有漏無漏に通じて内樂と云われるが、今は但有漏のみを取つて内樂となし、以て智慧所生の樂たる法樂樂に揀ばんとするのである。

一。智度論三十一に云く、

「五識相應樂、是名外樂。意識相應樂、是名内樂。麁樂名為外樂。細樂名為内樂。如是等分別内外樂、苦受、不苦不樂受亦如是。」

この智度論の説は、樂受、苦受、不苦不樂受と分別するいわゆる三受門に約して明かされたものである。この三受門に対して、又五受門あり、対照して明かさば、

五受門 三受門

苦受

樂受

憂受

喜受

捨受

苦受

樂受

捨受(不苦不樂受)

身に感受するところの逼迫不適悦を苦受と云い、心にこれがあるのを憂受という。身に感受する適悦を樂受と云い、心にこれがあるを喜受という。故に苦受と樂受は今現に身に受けつつあるもので、樂受又は喜受は心中にあるものである。捨受(不苦不樂受)とは、身心に於いて感受する逼迫にもあらず、適悦のも非ざるものをいうのである。この五受門も、苦受と憂受を合して苦受、樂受と喜受を合して樂受として、三受門となるのである。

今、三受門に於いて明かされるが故に、外樂を五識所生の樂、即ち欲界の五欲の境に依りて起す樂とし、内樂を、初二三禪の意識の樂、即ち五欲の外塵を縁ぜずして起す樂とせられる。しかるに、五受門に依つて言わば、欲界にも意識の樂がある、喜受と云われるのがそれである。喜受とは、心にある喜びである。又、初禪二禪三禪、色界の樂を内樂と云われたが、しかし、初禪にも前五識の樂ありと説かれる。智度論三十一に、「欲界中の五識相應の樂、初禪中の三識(眼、耳、身の三識、鼻舌二識なし)相應の樂、三禪中の一切の樂、是を樂と名く。欲界及び初禪の意識相應の樂、二禪中の一切の樂、之を喜と名く。」とあるが如く、欲界は五官の外樂、色界は意識の内樂とは局られないのである。いづれにも外樂内樂を有するのである。しかるに今これを局るは如何。これ多勝の義によるのである、多勝の義とは、欲界にも、意識の喜受即ち内樂がありはしても、五識所生の樂の方が多くて勝れている。又、色界にも三識相應の外樂がありはしても、定所起の内樂が多勝であるが故に、その中に摂められるの

である。欲界の喜受の如きは意識の樂ではあつても、もと外樂が多勝であり、これあつての内樂であるが故に、外樂へ摂められるのである。故に今、鸞師は、欲界の外樂、色界の内樂と、内外樂を分別せられたのである。今この二樂は、三界虚妄顛倒の樂である。これを挙げて、界外の無漏の大樂に揀ばんとせられるのである。

一。次に法樂樂を釈して、「三者、法樂樂謂智慧所生樂」と云われる。法樂樂とは、

法——仏正法

樂——音樂

樂——安樂

故に法樂とは法譬並び言うて名とせられたのであり、これに樂を加えて、妙樂勝真心の何たるかを示されるのである。

法を音樂というは、孝経に「移風易俗莫善於樂」という句がある。風俗を悪より善に移し易うるものは、音樂より善きはないというのである。この意である。云く、四顛倒を易えて、涅槃の四徳を得るといふ。是れ果に約する説、これを因に約せば、信心歡喜を此樂となす。

今家に約せば、此樂、諸行往生の風を移して、念仏往生の俗となすが故に、法樂といふ。果に約せば、涅槃の証果、即ち彼土の益。此土彼土の兩益俱に信心の智慧より起るが故に、「智慧所生の樂」と云われる。

又云く、無始已來の菩提相違の風俗を移して、順菩提の俗に易えるが故に法樂と名づける。この法樂によつて妙樂心を生ずるが故に、名づけて法樂樂といふ。この樂こそは、界外無漏の智慧より生ずるが故に智慧所生の樂と云われるのである。信心歡喜こそは、この仏智所生の法樂樂である。

一。「三法樂樂謂智慧所生樂。此智慧所生樂從愛仏功德起」

鸞師は、樂を分つて、外樂、内樂、法樂樂の三種とせられた。しかし外樂はこれを欲界五識の樂、内樂はこれを色界意識の樂とし、この迷界の樂に棟んで挙げられたのが第三の法樂樂である。この法樂樂とは、いわゆる法喜樂、法味樂等とよばれるもので、無漏清淨なる樂である。後の妙樂勝真心がこれである。しかしこの樂は、智慧より生ずるものであるが故に「謂智慧所生樂」と謂われるのである。法樂樂は、本願力回向の信心の智慧より生ずるのである。久遠劫來の菩提相違の風俗を移して、順菩提の俗に易えたまうところの如来利他の智慧によつて生じたる樂、無漏清淨なる智慧より生ずるのである。

然ればかかる智慧は何故に眞實の樂を生ずるのであるか、智慧所生の樂は、轉迷開悟の大用を具するのであるか、これに答えて、

「此智慧所生樂 從愛仏功德起」

と言われる。智慧は功徳を愛する。功徳によつて功徳に向かつて開眼する。それが即ち智慧である。功徳によつて生じたる智慧は、それ故に功徳を愛する。ここに功徳はその大用を發揮して、眞實の大樂を行者の上に顯現するのである。内樂外樂は、妄想顛倒より生ずる無明煩惱の所生であり、法樂樂は、智慧、即ち功徳を愛するより生

ずるのである。功德とは、仏の大善大功德である。略一処、仏の功德に専念專注するより起こるのである。略一処成就のみこと頂くべきである。この文正しく略一処の意を積したまうに過ぎず。

菩薩の徳もとより、通じて三業莊嚴を縁するより起こるものなるも、三種即ち一仏徳とするは、菩薩は、広略相入の境徳に達することを示すのである。

菩薩の真樂は、智慧より生ず、仏徳を愛樂する智慧より生ずること、誠に銘記すべきである。

一。本文。「是遠離我心遠離無安衆生心遠離自供養心是三種心清淨増進略為妙樂勝真心」

一。ここに挙げられたる、遠離我心貪着自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心の三種心は、障菩提門に於いて示されたるところの、菩薩離障の三心であった。即ち菩薩は、智慧門に依るが故に自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離し、次に慈悲門に依るが故に一切衆生の苦を抜かんが為に、無安衆生心を遠離し、方便門に依るが故に、一切衆生を憐愍するの心を以て、自身を供養し恭敬する心を遠離するのであった。これ正しく障菩提の三種心を遠離することを示されたものである。

しかるに今は、菩薩が正しく大法によつて涅槃の道を獲たる、妙樂勝真心を明かさるる処であるが故に、寧ろ、順菩提門の三心、即ち無染清淨心(智慧門)安清淨心(慈悲門)樂清淨心(方便門)を挙げらるべきではないか。しかるに順菩提門の三心を挙げずして、離障の三心を挙げられるは何故であろうか。これ離障は表裏一体であつて、離障のところのみに於いてのみ、順菩提があるが故に、又、論には既に、「この三種の心は(無染清淨心、安清淨心、樂清淨心の順菩提門の三心)略して一処に妙樂勝真心を成就したまえり」と説かれてあつて、重ねてこれを挙げなくても、妙樂心の内容として示されてあるのである。されば、今は離障の三種心を挙げて、捨離の方を示し、そこに自ら取るべき世界を明かさんとせられるのである。障碍となる三種心を遠離せずして、尊きものを成就せんとするは凡夫の通弊である。

一。「是の三種の心清淨に増進するを略して妙樂勝真心と為す」というは、清淨増進とは、清淨とは今の三心のことであり、増進とは妙樂勝真心のことである。略してとは、三種心は遂に三種心のままあるのではなくて、一の妙樂勝真心となるのである。離障の三心と順菩提の三心は、表裏一体に、菩薩の上にあつては、略して一処に妙樂勝真心となつて成就するのである。この心即ち先の智慧所生の樂であり、仏徳を愛するより起るところの法樂樂そのものである。

一。本文。「妙言其好。以此樂縁仏生故。勝言勝出三界中樂。真言不虛偽不顛倒。」

この文は、妙樂勝真心を積せられる。この樂の妙好なる所以は、仏徳を縁することによつて生ずるが故である。これ仏の第十八願、不虛作の仏徳に約するの積である。

勝とは、三界中の楽に勝出することを示すので、迷界一切の苦楽を超越せる大楽、これ浄土の清浄なる国徳に約しての釈である。この心、浄土の清浄功德さながらの勝樂である。如来本願に生きるものは三界を勝出せるこの妙樂勝真心を獲るのである。

真言不虚偽不顛倒とは、不虚偽とは、不虚作功德、不顛倒とは清浄功德、この浄土三嚴二十九種中の総相によつて、二十九種莊嚴を統べ、広略不二の境智を示すのである。浄土無量の莊嚴も、これ如来清浄功德の略相におさまつて、唯一の自利真實功德相となり、又莊嚴不虚作の徳より見れば、大悲利他回向の願心莊嚴に外ならず。利他を全うしたる自利(真實功德)自利を全うしたる利他(願心莊嚴)。願心莊嚴の故に不虚偽、真實自利の功德相の故に不顛倒である。されば、妙樂勝真心は自ら二義を存す。即ち、願心莊嚴、不虚作の徳を縁じて生ずるより云わば、建章の我一心帰命の安心であり、清浄功德入一法句を縁じて生ずるより云わば、無相の真樂を得るの一心である。

されば六要鈔四に云く、

「妙樂勝真心は般若の樂なり。寂滅無為生死の患を滅するが故に樂と為す也。上の柔軟心は是れ自利究竟の広略不二心也。自利を全うじて利他を起す。五六七章次に増進して終に今の一心を成ず。この一心自利利他不二なり。」

実に妙樂勝真心とは、智願回向の自利利他不二心である。これ正しく其の心相を語れば一心帰命である。善巧摂化章已下は、この一心帰命の安心の体徳を示されたのである。一心体具の徳を説けば、誠にかかる広大の徳ありと示されたる一心具徳門に外ならず。かかる不可思議広大の徳ある大菩提心なるが故に必ず菩提に至る。体徳を略一処に論ずれば、妙樂勝真心と言われる。一心帰命即ち今の妙樂勝真心、自利利他一如、悲智不二の大菩提心、建章の一心帰命の徳相を示して妙樂勝真心と名づけられる。この心虚偽ならず、この心顛倒せず、三界に出過して虚妄を離る。因に就いて嘆ずれば法蔵菩薩の善巧摂化の徳、果に約して談ずれば盡十方無碍光如来そのままの一心。故に高祖「廣大無碍之一心」と讃嘆せらる。しかも衆生の機の方は、「心得やすの安心や、ゆきやすの浄土や」聞其名号信心歡喜、聞く一念に回向せられる易行他力の一心である。

一。一心の体徳に就いて。

以上によつて、我等は、帰命の一心が如何に広大なる徳を具足するかということについて知ることが出来た。帰命の一心とは、行者にあつては、其の名号を聞信して得るところの安心である。即ち第十八願の三信を全うしたる本願力回向の大信心である。それであるが故に、もしそれ、これを如来のお手元に於いて沙汰すれば、方便智の中に智慧門、慈悲門、方便門の三種門を成就して、この三種門によつて回向したまうもの即ち、帰命の一心である。されば衆生の機に於いて顕現せる一心帰命はそのまま、法体に約せば、智慧門慈悲門方便門の三種門なるが故に、この三種門こそは一心の体徳そのものである。この三種門の徳なくば、一心帰命は、真實なるものということは出来ないものである。

しかるに今、論に於いては、これを菩薩の法、即ち還相の菩薩の徳として示されたのである。如来浄土の眷属として永久に還相悲化する菩薩の徳を示されたものであ

る。しかるに還相菩薩の徳は、そのまま本仏の本願力の徳なるが故に、これを法蔵菩薩の徳として見たまうのが我が聖人であった。ここに於いて、この三種門は、本仏の本願名号に内在する徳であると共に、行者の一心帰命の体徳であり、やがて、還相の菩薩の發揮する徳であった。かくの如く、生仏不二の徳を語る世界をこそ第十八願の世界といのであった。かつて「柔軟心」の題下に善巧撰化章已下を講じた時「菩薩」なる文字は、願生行者とも、還相の菩薩とも、法蔵菩薩ともとることが出来ると言ったのは、これがためである。一心の行者が、如来の回向によつて獲得するものは、如来の全功德である。往還二種回向は名号の中に撰在して一念に回向されるが故に、その行者に於ける相発には、自ら因果の次第あるも、一念の信に於いて欠ぐるところはないのである。これ一心即五念門の法門の説かれる所以である。自利利他の自利を語るもの往相なれば、自利利他の利他を示すもの還相である。まことに行者發起の一心を、廣大無碍之一心と云われ、廣大難思之慶心と云われるものは、この一心のうち、智慧門慈悲門方便門の徳あつて、限りなく撰取し善巧回向したまうが故である。されば、道綽は安樂集に、信心の徳用を嘆じて、

「菩提(信心のこと)とは、乃ち是れ無上仏道之名なり。もし発心作仏せんと欲わば、この心広大にして法界に周徧し、この心長遠にして未来際を盡し、この心普く備さに二乗の障を離る。もし能く一たび発心すれば無始生死の有輪を傾く。」
と仰せられた。一心の体徳思ふべきである。

一。名義撰対について。

標章の「名義撰対」ということについて、最初に語つたように、名義撰対ということとは、能詮の名(あらわしてであるところの名)としよせん義(あらわされて、即ち名によつて謂いあらわされる義)とを相対比して、一つの義の中に多くの名を撰めるといふことである。即ち、

「向に智慧慈悲方便三種門は、般若を撰取す。般若は方便を撰取す、と説きつ。知る心しとのたまえり。」

この論の文に於いて、般若の智慧(根本智、又は実智)と方便智(後得智、又は権智)との二心(義)が、各、智慧、慈悲、方便の名と撰対することを示されたものである。即ち、方便智によつて衆生は助けられるのであるが、その方便智は、智慧慈悲方便の三種門の名を撰めて初めてその義が詮われるのである。その方便智は、しかしながら、般若の根本智なくしては生まれえないし、般若は方便智となつてはじめて般若を全うするのである。故に「三種門は般若を撰取す 般若は方便を撰取す」と云われるのである。般若の平等智なくしては、方便の権智なく、方便の権智なくしては、般若の根本智の多用は顕われない。互いに能撰となり、所撰となること知るべきである。故に、巧方便の具体相たる三種門を般若が撰取し、三種門の方便智は般若を撰取すること知るべきである。

六要鈔には、この初段のみによつて名義撰対章と名づけられたものとせられる。

しかるに大派の香醉師は、上に挙げた九種の法門と、そのしよせんの義たる四心(般若、方便、無障心、妙樂勝真心)との相撰を明かすとの説を樹てられた。この説によれば名義撰対の標目は、本章三段全体にわたって立てられたとするのである。即ち、

智慧門 般若

第一段障菩提門 慈悲門 三種門の名 義

方便門 方便

遠離我心貪着自身

第二段障菩提門 遠離無安衆生心 三法の名 義||無障心

遠離供養自身心

無染清浄心

第三段順菩提門 安清浄心 三心の名 義||妙樂勝真心

樂清浄心

以上の如く、この第二説は、全章にわたつての文の義理を明かにするに便なるが故に、この説を用いられる。

第二段の文に於いては、智慧門によるが故に、我心貪着自身を遠離し、慈悲門によるが故に、無安衆生心を遠離し、方便門によるが故に、供養恭敬自身心を遠離する。この三法の名は、無障心と互いに撰対する。この三法は無障心を撰取するし、無障心16はこの三法を撰取するこれ名義撰対である。

第三段の文は、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心は、妙樂勝真心と互いに撰対することを示されたものである。

かくして、九法、四心の法門は、互いに撰取しつつ、遂に略一処に、妙樂勝真心を成就するのであった。妙樂勝真心とは一心帰命の安心である。まことに行者にあつては但、信心決定して念仏するところの易行の一道なれども、裏をかえせば、そこにはその体徳として、九法四心の大法門は具足されているのである。智慧慈悲方便の三種門は、やがて九法四心の法門と展開せられて、妙樂勝真心を成就するのであった。ここに於いて、善巧撰化章、障菩提門章、順菩提門章、名義撰対章にわたつて説かれたる法門は、この妙樂勝真の一心に既結するのであった。妙樂心は帰命の一心に外ならず、一心帰命の大信の廣大知るべきである。名義撰対章を了る。

(二) 願事成就

一、標章

一。本文「願事成就者」

一。願事成就とは、六要鈔四に云く

「願とは謂く願心、即ち論所列の智慧心方便心無障心勝真心の四菩提心なり。是を名けて願と為す。事とは謂く業事、五念門の行なり。是を名けて事と為す。此願行に依つて彼の国に生ずることを得。是を成就と名く。」

已上に依れば、願とは菩提の志願、即ち作願門のことである。名義撰对章に於て述べられたる智慧、方便、無障、妙樂勝真の四心を全うしたる菩提心を願ということである。事とは事業で、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五種の事業のこと、即ち五念行のことである。この願心と五念行と、心と行と分てば二なるも、行成ずれば心成じ、心成ずれば行成ず。この心成即行成を示さんとして、願事成就と名づけられるのである。成就とは、文には自在成就という。自在成就とは、報土の証果の成就するを謂うのである。願以て行を運び、行以て願を満す、かくして願が所求の事業を究竟成就するのである。已上は具徳に就いて弁ずるのであるが、もし衆生の機相に約すれば、願とは信心のことであり、事とは起行のことである。信の処には、必ず行を具す。大信一度決して、命延ぶれば、五念行を起すべき徳あるが故に、願行具足して往生の業事を成弁するのである。

一。今章の生起には遠近の二意がある。近くは今迄に明せる般若方便等の四心を承けて、願成就して、往生するに堪ゆることを明すのである。即ち論に「如是菩薩……能生清浄仏国土」とあるのがこれである。

遠くは、第二起觀生信章の「修五念門行成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏」とあるのを承けて、五念の事成就して、彼土に於て、所作自在を得ることを明すのである。文に「是名菩薩乃至隨順法門自在業成就」というのである。

四心の願と、五念の事と、所願且く異なりといえども、建章の一心願生の功用を示すことは即ち一である。然れば、起觀生信已來を承けて願生浄土の業事成弁することを明かすを今章の大意とするのである。行は願によらずば成就しない。願に行がなければ、願は無内容である。願によつて行は任運自在に成就する、願が所求の事を究竟成就する、その事を明かす章なるが故に願事成就というのである。

二、明心成就

一。本文。「如是菩薩智慧心方便心無障心勝真心能生清浄仏国土。応知。

応知者謂応知此四種清浄功德能得生彼清浄仏国土非是他縁而生也。」

一。能生仏国土。この節は、四心成就して能く浄土に生ずることを明し、以て業事成弁することを顯すのである。

智慧心等の四心は、第五回向門の諸心である。回向は、菩薩の方便波羅蜜であつて、大菩提の正因である。であるからこの四心を正因として仏国土に生ずるのである。この四心こそは、自利利他の利他であるが故に、利他は必然に自利利他の自利を究竟成就するのである。であるから、この四心成就こそ願事成就圓滿する相である。

或説には、この四心について、二の相對あることを示す。この中の二對とは、まず、智慧心方便心の一對である。この真俗二諦に望めて立するのである。即ち、真諦の如に契うを智慧心とする。即ち般若波羅蜜である。次に俗諦の差別を縁するを方便心とする。即ち方便波羅蜜である。この一對は名義撰對章の意である。

次に、無障心と勝真心との一對である。無障心は、方便波羅蜜中の初起の位、勝真心はその後増進の位である。

これによつて知らるるが如く、智慧心は、般若波羅蜜の如に達する慧とよばれたものである。それを今、回向門の諸心に撰められるのは、ここが即ち名義撰對の、相順相撰の義門を示される所である。智慧方便は、相縁りて動き、相縁りて静かなる、方便心が備さに衆機を省みて而も宛然として、動せず、無知なる、般若の慧の静にしてしかも方便の動を廢せるは、これ皆、般若に撰められる方便なるが故である。この相縁の門なるが為の故に、智慧心が自然に回向門の四心となるのである。今、能生清淨仏国土と云わるるは、この四心によつて正因円滿せることを顯すのである。即ち、菩薩が正しく清淨なる仏国土に往生する因は、四心具足の五念門の行である。

一。非他縁生。

「応知とは謂く、この四種清淨の功德能く彼の清淨仏国土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る心となり。」

この積、四心を除いて更に淨土往生の余因なきことを示されたものであつて、自利利他成就せんとする菩薩は、必ずこの四心に生きて一切衆生と共に願生するのである。しかるにここに一の疑問がある。一論の所被の機は、下々品の劣機ではないか。然れば下々品の劣機もこの菩薩回向門の四心を起こさねばならないこととなる。下々品の劣機も具足しなければならぬこの四心を何故に回向門に出すのであるかということである。

一論所被の機は下々品である。しかも回向門の諸心を因として往生するのである。けれども、往相回向の生活者としての願生者は、この四心を我がものとは考えず、これを如来の巧方便回向の願心の内容として信知するであらう。故に、論の文も、

「是の如きの菩薩は智慧心方便心無障心勝真心をもて能く清淨仏国土に生ぜしめたまえり。」

と訓点を施されるのである。これ、この四心をもつて法体成就の徳、やがて信の体徳として示されるのである。もし行者の心の行相を論ずれば、往生一定の行相、即ち無疑の一心に外ならない。故に下々品の劣機にありても亦、この四心の徳を内具して淨土の真因として、願力成就の土に入ることを得るのである。

一。四心と本願回向の一心。

已に述べるが如く、智慧心、方便心、無障心、勝真心の四心を具足してのみ、淨土に往生することが出来るのである。故に今、「この四種清淨の功德能く清淨仏国土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る心」と論には示されるのである。しかるにこの論の意は、「他縁をして生ずるには非ず」とは、「仏の回向

にして他の因には非ず」との心であつて、この四心は法体成就の徳、やがて信の体徳を示されたものとなり、行者の機に約せば、無疑の一心に外ならないのである。であるが故に、如何に下々品の劣機といえども、この四心の徳を内具して清浄仏土に往生するのである。

然らば、何故に、無疑の一心を因として仏土に生ずと云わずして、体徳について四心を立てるのであるかという疑問を生ずる。

これ論の意は、浄土の大菩提心を安立せんとするのである。浄土の大菩提心はこの四心を具足することを顕すのである。しかして、仏道の正因は但この四心を具足する巧方便回向門、即ち第五の回向門にあり、故に、論主はこれを安立して以て浄土の正因とせんと欲したまうのである。故に智慧等の四心を体徳として立てて、これを浄土の回向門ならしめ、浄土の真因に当てられるのである。

この四心を全うする回向門こそは仏道の正因である。これを浄土の大菩提心として、還相の菩薩は正しく、この回向門によつて、回向を首として大悲心に生きるのであるし、往相の行者は、回向門によつて、この四心を全うしたる一心帰命の信心を回向せられて、浄土に往生するのである。身、生死界にあつて度せらるべき衆生が、自ら還相菩薩の回向の相をとることは、己を深信せざる憍慢ではあるが、しかしこの四心を全うする大信を發起すること能わぬものは、自力疑心の世界を出ることの出来ぬものである。

されば、この四心こそは行者の無疑の一心である。

何故ならば、天親論主は、建章の自督門に於いて、一心帰命を以て、願生浄土の正因を示された。これ、自利利他の自利の相である。しかるに、回向門は、自利利他の利他門である。自利利他すでに一如である。一心帰命の自利には、利他の徳を具足して、如何なる下々品にも回向せられて、浄土の正因となるのである。四心は、無疑の一心となるのである。

されば宗祖は、信巻末に、願成就の一念の異名を列ねて後、

「是の心は即ち是れ大慈悲心なり。是の心は即ち是れ無量光明慧に由りて生ずるが故に、願海平等なるが故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故なり。」

と示された。これ浄土の莊嚴性功徳を説かれる時には仏の上に顕された大慈悲を、今はこれを行者の上にあらしめたもうたのである。知るべし。如来の徳は、悉くこれを行者の上にあらしめたもうたことを。更に二門偈を開けば、

「云何が回向する、心に作願したまいき。苦悩の一切衆生を捨てずして、回向を首と為て大悲心を成就することを得たまうが故に、功徳を施したもう。」

と、大慈悲を本仏の上にあらしめたもうた。これ正しく仏にあつては、大悲心を正因として正覚を成就し、衆生にあつては、その大慈悲の回向によつて無疑の一心帰命を發起し、還相の菩薩は、この大慈悲に由つて利他度生を成ずるのである。誠に、もしは仏、もしは菩薩、もしは衆生、悉く大慈悲を以て仏道の正因となすのである。かくの如く、生仏交互して、大慈悲より外、真因に二なきを第十八願絶対他力の法門とするのである。

智慧心、方便心、無障心、妙樂勝真心の四心こそは、大慈悲の具体的内容である。一心帰命即ちこの四心なること知るべきである。これを外にして、仏土往生の正因はあり得ないのである。されば、他縁を遮して、

「応知とは、謂くこの四種清浄の功德能く彼の清浄仏土に生ずることを得しむ。是れ他の縁をして生ずるには非ずと知る応し」

と仰せられるのである。一心即四心、四心の体徳を全うする帰命の一心なることを知るべきである。心成就の積、了る。

三、明行成就

一。本文。

「是名菩薩摩訶薩隨順五種法門所作隨意自在成就。如何所説身業口業意業智業方便智業隨順法門故。」

一。隨順法門。

已下五念行の成就を明かされるのである。まず、論文を引き、次に註釈せられる。ここに出したのは、浄土論の文である。次の隨意自在者已下の文から註釈である。表すれば

論文 是名菩薩已下

明行成就

別釈 隨意已下

註釈

総釈 言此

「是」とは、智慧心・方便心・無障心・勝真心の四心成就によつて、清浄仏土に得生することである。故に是とは四心成就を指すのであるが、遠くは起観生信章已下の全てを受け結んで、是をと示されたのである。起観生信章の初めには、

「起観生信者此分中又有二重。一者示五念力二者出五念門。示五念力者云何観云何生信心。若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。出五念門者何等五念門。一者礼拝門二者讚嘆門三者作願門四者觀察門五者回向門。」

と、五念力及び五念門が標出されてある。今、四心成就をこの五力の標文に結合して、四心成就得生仏土そのままが、五念業成なることを示されるのである。四心得生を以て五念所成に合するが故に「是名……」と云われるのである。五念行が成就すれば畢竟して安樂国土に生じ大涅槃を証するのである。これ即ち五念力と云われる所以である。

一。「是を菩薩摩訶薩、五種の法門に隨順して、所作意にしたがつて自在に成就したまへりと名く。」

五種法門とは、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念行のことである。この五念行こそは往生浄土の法門なるが故に、この五種法門に隨順せずば、往生浄土することは出来ないのである。隨順とは、修行する所、如法にして違逆することなきをいう。即ち五念行の如実修行である。五種法門に隨順すること即ち四心成就することである。勝真心こそは、この五念行に隨順せる心である。

「所作隨意自在成就」とは、所作とは、菩薩が彼国に至つて得る所の動靜出沒をいうのである。出沒意にしたがつて自在に成就するとは、還相利他の自在なることを明されたのである。

一。「如向所説身業口業意業智業方便智業隨順法門故」

五種法門に隨順する五種業を示されるのである。蓋しこの五種の業こそは、菩薩の全人格である。身口意の三業、それに智業、方便智業の五種の業によつて、法門に隨順するが故に隨順法門と云われる。

一。本文。

「隨意自在者言此五種功德力能生清淨仏土出沒自在也」

一。隨意自在。已下註釈であり、註釈中の別釈である。論の隨意自在ということとは、この五種法門功德力が、菩薩をして浄土に生ぜしめ、出沒自在ならしめることである。鸞師深く論の義を探ねて、隨意自在を出沒自在の義とせられたのである。

出沒自在とは、出沒とは、六要鈔に二解を出す。初は入出二門に約して説く。出とは出門、沒とは没入で入門、故に出とは還相利他を指し、沒とは往相自利を示すとす。後は、出沒共に利他に約して、出とは穢土に出でて衆生を利すること。沒とは還つて本国に入ることを説かれる。この外、一説には、總じて一切の所作の事業を出沒となすという説あり。これ「動靜己に非ず、出沒必ず由あるがごとし。」とある場合の如くである。

一。本文。

「身業者礼拝也。口業者讚嘆也。意業者作願也。智業者觀察也。方便智業者回向也。」

一。隨意自在(続)

論の隨意自在ということとは、五種法門の功德力が、菩薩をして往生浄土を可能ならしめ、出沒自在意の如くならしむことであつた。しかるに菩薩の生活は、全てこれ法門に隨順せるものである。法門に隨順するが故に、隨意自在に出沒二利を成就することが出来るのである。

然れば菩薩の何が如何なる法門に隨順するのであるか。それを示されたのが、即ちこの文である。即ち菩薩は、身業に於いて礼拝門、口業に於いて讚嘆門、意業に於いて作願門、智業に於いて觀察門、方便智業に於いて回向門に隨順するのである。これ

正しく菩薩の五業が五念行に隨順することを示されたものである。これ即ち浄土の菩薩の修行の公準である。かく菩薩は、五業を以て五念門の行を行じて、五種の功力を得、清浄仏土に生じて出沒自在なるを得るのである。

一。本文。

「言此五種業和合則是隨順往生浄土法門自在業成就。」

一。五種業和合。

「此五種業和合」ということについては、様々な説がある。一説には、五種業を全て願生の事に為し、五念行を修するに、各別之志求に非ざるが故に和合というを示す。これ浄土の法門に隨順して願生するのであるが故に、五念各別の志求のあらうはずがない。これを和合というのである。

一説には、五念行が信と和合すること。即ち行が信を離れざるをいうととる。これは大事なことであろう。身業には礼拝門を行じ、口業には称名讚嘆し、意業には浄土に願生するかに見えて、しかもそれぞれが一に融けず、如実でないのは、五念行が一心帰命の信と和合せざるが為であろう。行にして信を離れるならば、信も如実の信でなく、行も亦如実ではなく、往生の業事成弁することは出来ないであろう。この説は又、五念が法徳自然に妙樂勝真心の一処に和合すともいうことが出来る。一処に和合するは、法自然の徳の然らしむる所である。

次には、自利利他二利互に成就するを和合とつた説がある。これが五念成就の位²²を指したものである。入門自利は出門利他に、出門利他は入門自利に互成して自在の業成するのである。

次には又、法と機とに分つて二意ありとせる説である。即ち一には体徳に約せば、五念各各別の相を泯して広略自他不二の妙樂勝真心を成ずるを和合という。二に機に約して云えば、五念行は機上の相発であつて、一信心の相続の相に外ならない、故に行者にありては、唯願力を仰ぐ相であつて五念の別相を見ず、此を和合というといふのである。この二は共に同じく往生浄土の法門に隨順する。即ち初は入一法句の法門に、後は願心莊嚴の法門に隨順するを示せるものである。

已上、何れの説をとつても間違いではないが、因に約せば、五念行は、一心帰命の大信の相發發展せるものであるから、信行和合というのが、わかり易く、果に約して言えば、二利互成の説がいいであろう。五念を成就して自在業成ずると云えば、自利利他の成就に外ならないが故である。いづれにしても、五種業は、法徳自然のままに渾然和合融会して一になつていないならば、全我の事実ということとは出来ない。

一。自在業成就。

自在業とは、浄土に往生して、出沒自在なることを自在という。即ち或は浄土に入り、或は浄土を出るに、入出自在なる義である。業とは、因業、即ち出沒自在なる因業のことである。五念行が具足成就すれば自在の業具足する。因業成弁するを業成就というのである。

今の文の読方に二あり、即ち

「この五種の業和合せり則ち是れ往生浄土の法門に隨順し自在の業成就す。」

「この五種の業和合せり則ち是れ往生浄土に隨順するの法門自在の業成就す。」

前の如く、往生浄土の法門に隨順す、と読めば、往生浄土の法門に隨順する時、入出二門自在の業が円満するとなり、後の如く、往生浄土に隨順する法門自在業成就すとすれば、法門即ち自在なりということになる。二義共に通ず。

五種和合して浄土の法門に隨順すれば、法門自爾の徳、自在の業、即ち出沒二門の大因を円満成就するのである。

一。結言。

願事成就章を了った。私は先には、「柔軟心」の題下で、次には、「一心の体徳」という題で長い間、一心五念の法門を頂戴した。実に、一心こそは、如来本願によつて行者の上に回向成就せしめたまう全てである。

この一心こそは、智慧門慈悲門方便門の三門、遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身の三法、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心の三心、已上の九種の法門は、般若と方便と無障と妙樂勝眞の四心と名義撰対して、遂に略一処に妙樂勝眞心を成就するのであつた。しかして菩薩は、この四心によつて五念行を成就し、清浄仏国に生ずることを得て、出沒自在の業事成弁することが出来るのであつた。これ論の意は、行者としての菩薩の發揮する徳として示されたものであるが、しかしながら、かくの如き功德成就の相が、一心より相發するは、本より、如来回向の大行の上にご23の徳を内具するが故である。即ち、法蔵因位に於いて、この四心九法の法門、五念行の業事成弁して、自在の業成就したまえるが故に、行者は唯願力を仰信して念仏報謝の一道にあるに、よくかくの如くなることを得るのである。

されば、九法四心の法門、一心五念行は、法体成就して円満なるものである。行者一心相続の背景にはまことに、如是の広大なる法門あるが故に、行者は聞信の一念によつて不退轉の一道にあり得るのである。一心の体徳の広大知るべきである。(終)